

～ロタウイルス胃腸炎とワクチン～

小児科 ^{すずき}鈴木 ^{としひで}紀秀

冬場に多く発生する病気のひとつに、腹痛、下痢、嘔吐、発熱を主な症状とする「ウイルス性胃腸炎」があります。ウイルス性胃腸炎の代表的な原因ウイルスには、ロタウイルス、ノロウイルス、アデノウイルスなどがありますが、なかでもロタウイルス胃腸炎は激しい嘔吐や白っぽい下痢が起こるのが特徴です。特に生後6か月から2歳くらいまでの乳幼児に感染・発症しやすく、重症化すると重度の脱水、けいれん、意識障害、脳炎・脳症などを起こすことがあります。

ロタウイルスの感染力は非常に強く、手洗いや消毒だけでは防ぎきれません。そのため誰かが感染すると、その周囲の多くの子どもたちがかかってしまいます。また、インフルエンザウイルスや水痘ウイルスには効く薬がありますが、ロタウイルスには効く薬はありません。胃腸炎を発症した場合は、こまめな水分補給で脱水を防ぎますが、点滴や入院が必要になること

もあります。平成12～24年の統計では、毎年およそ8万人が入院し、約10人が亡くなっています。また、まれではありますが、ロタウイルスによる脳炎を発症した場合は後遺症率が38%にのぼるとの報告もあります。

このロタウイルス胃腸炎の重症化を防ぐ手段としてワクチンを接種する方法があります。口から飲むワクチンで、生後6週から接種を開始できますが、生後6か月までに2～3回接種する必要があります。ヒブワクチンや小児用肺炎球菌ワクチンなどと一緒に、生後2か月から接種を始めると良いでしょう。

1月頃から春先にかけては特にロタウイルス胃腸炎が流行しやすい季節といわれています。予約による任意接種となり実費負担が必要ですが、市民病院でもロタウイルスワクチンの投与を行っています。小さなお子様がいる方はご相談ください。

問合せ 市民病院 ☎24-6111 FAX 22-0887